

第1章 糸魚川市の概要

1 自然的・地理的環境

(1)位置

糸魚川市は、新潟県の最西端に位置し、東は上越市、南は妙高市、長野県小谷村、白馬村、西は富山県朝日町と接しています。面積は746.24平方キロメートルと広大で、東京23区の面積を上回ります。



図4 新潟県における糸魚川市の位置図

南には、活火山焼山や日本百名山で知られる雨飾山を頂きとする頸城山塊が市域の東半部を占めて日本海にせり出し、日本の屋根とも称される北アルプス北端の山並みは市域の西半部を占めて親不知海岸の急崖となって日本海に没しています。市域を囲む山々の大半が、「妙高戸隠連山国立公園」「中部山岳国立公園」「白馬山麓県立自然公園」に指定されるなど、自然豊かな山岳地を有しています。

また、海岸線は日本海に面し、東部は砂浜が広がる穏やかな海浜として「久比岐県立自然公園」が、西部は断崖絶壁の「親不知子不知県立自然公園」が広がります。

このように、豊富な森林、水資源や変化に富んだ海浜など、バリエーション豊かな自然資源に恵まれています。

しかし、裏を返せば、市域の約6割が森林山野であり、人々の生活の場となる平野部は各河川の下流域のごく僅かな面積に限られています。

上越市直江津以西のこの地は、かつて「西浜七谷¹」と呼ばれ、東から現上越市の桑取谷、名立谷、糸魚川市に入り、能生谷、早川谷、西海谷、根知谷、川西谷（今井・小滝・青海地区）の7つの谷が、険しい山々から急流となって日本海へと注ぎ込む地形を形成しています。そうした谷沿いに人々の暮らしが営まれてきました。

なかでも市域の中央を北流する姫川は、長野県白馬村親海湿原付近を源流とする急流として知られ、根知川、大所川、虫川などを合わせて海岸まで大型礫^{れき}を運んでいます。平坦地はこうした河川の流域と沖積地から海岸砂丘に広がり、能生川右岸には能生、姫川と海川の間には糸魚川、姫川と青海川の間には青海の市街地が形成されています。

(2)地形・地質

姫川は、日本列島を地質的に東西に分断するフォッサマグナの西端を成す糸魚川—静岡構造線に沿うように流れることでも知られています。

姫川以西の山々は古生代や中生代の地層から成り、飛騨変成岩帯では角閃石^{かくせん}、蛇紋岩^{じやもん}などの変成岩とヒスイなどの稀少鉱物の産出で知られています。また、明星山（1,188m）と黒姫山（1,221m）一帯は石灰岩から成り、黒姫山一帯は大規模なドリーネ²が点在するカルスト地形³で知られ、豊富な石灰岩は麓における化学工場、セメント工場の営みを支えています。

一方、姫川以東は新生代の地層から成り、山々の様相あるいは河床や海岸の礫^{れき}などは、姫川以西とは大きく異なっています。海川上流の海谷溪谷や市域東部の徳合地区などでは、砂岩や泥岩の互層から成る急崖を、今日でも水蒸気を上げる早川上流の焼山（2,400m）の裾野では、大規模な火砕流と土石流の痕跡、能生川の下流域では海底火山の痕跡などを観察できます。

また、海底も起伏に富み、海岸から比較的近距离で深海に至る地形となっています。

こうした深海2,000mの日本海の海底から標高3,000mに迫る山並みまで5,000mもの高低差を有し、起伏に富んだ地形により、貴重な自然を随所に観察することができます。

¹ 江戸時代に呼称されていた地域名

² 石灰岩地域に発達するすり鉢状の窪地

³ 石灰岩が雨水や地下水などによって溶かされて形成した地形

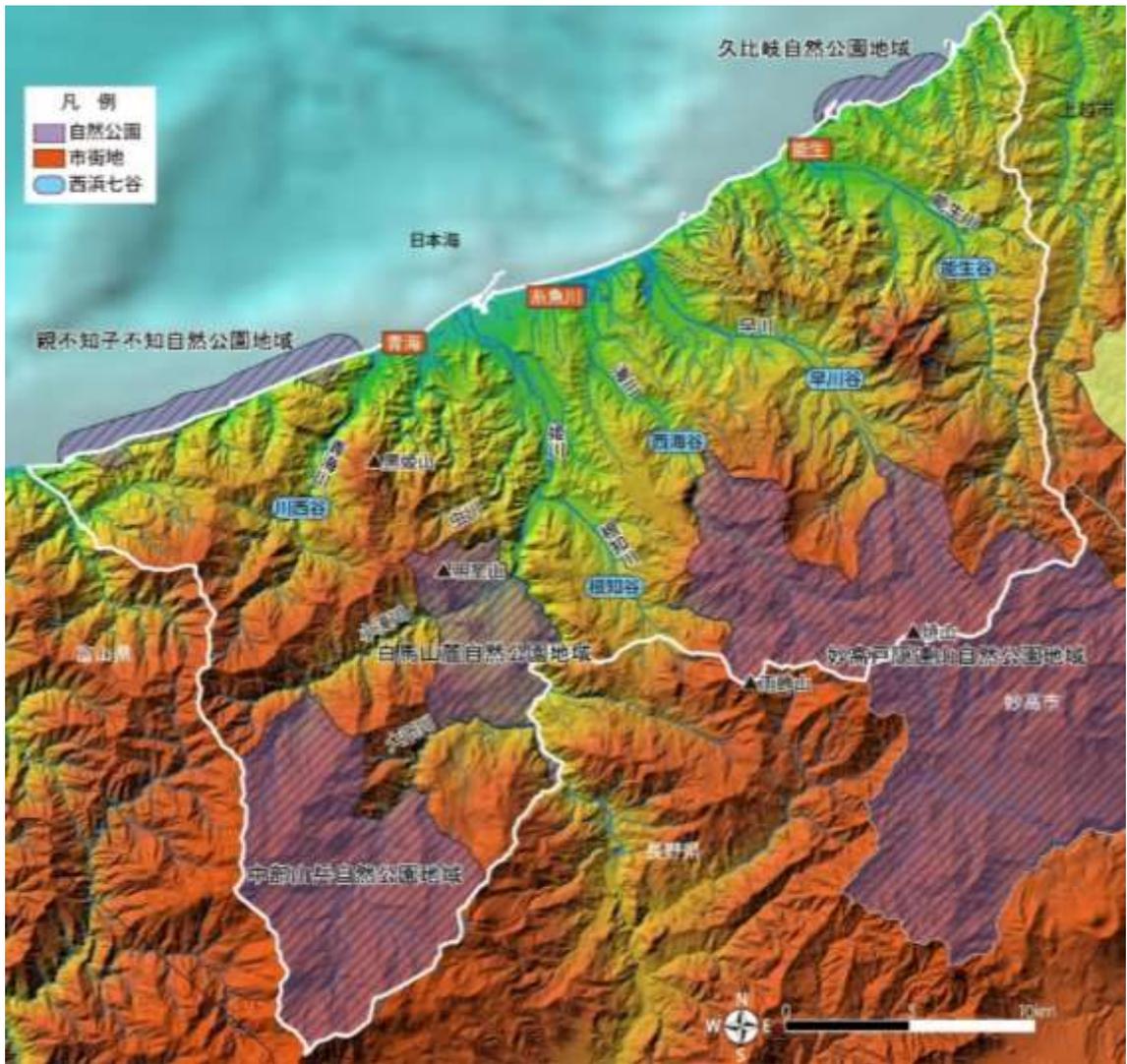
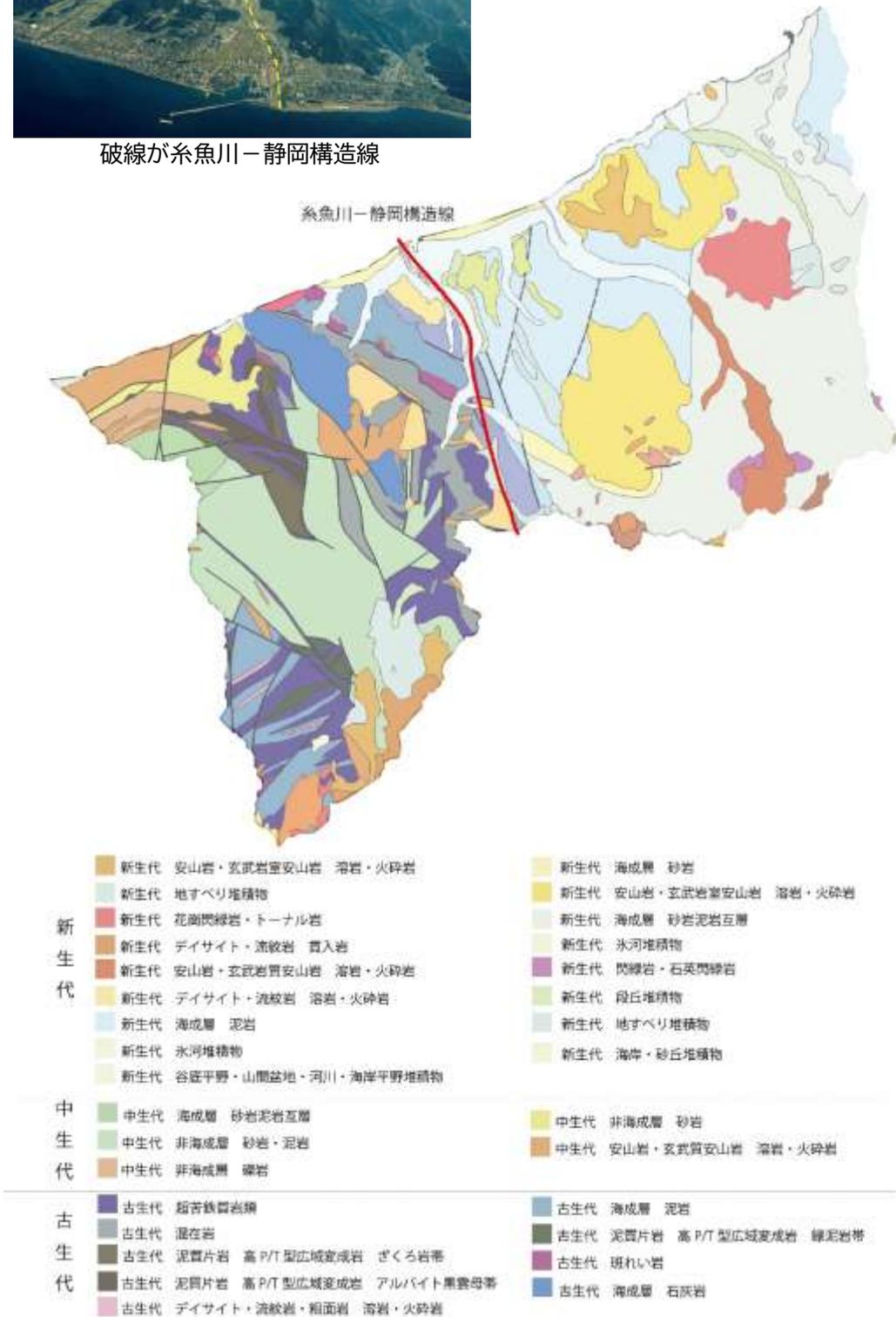


図5 糸魚川市の地形



破線が糸魚川－静岡構造線



出典：産総研地質調査総合センターウェブサイト

<https://gbank.gsj.jp/geonavi/geonavi.php#9,36.777,137.626>

図6 糸魚川市の地質図

(3)気候

日本海側の気候に属し、年平均気温は 14.4℃で降水量は年間約 2,900 mmです。市全域が特別豪雪地帯に指定されており、山間部では積雪深が 2 mを超える地区も多くあります。

また、平地が少なく、高い山に囲まれた南北の谷があり、川は南から北に一直線上に流れています。そのため、春から夏にかけてフェーン現象が起こりやすく、この川を沿うように強い南風が吹いてきます。

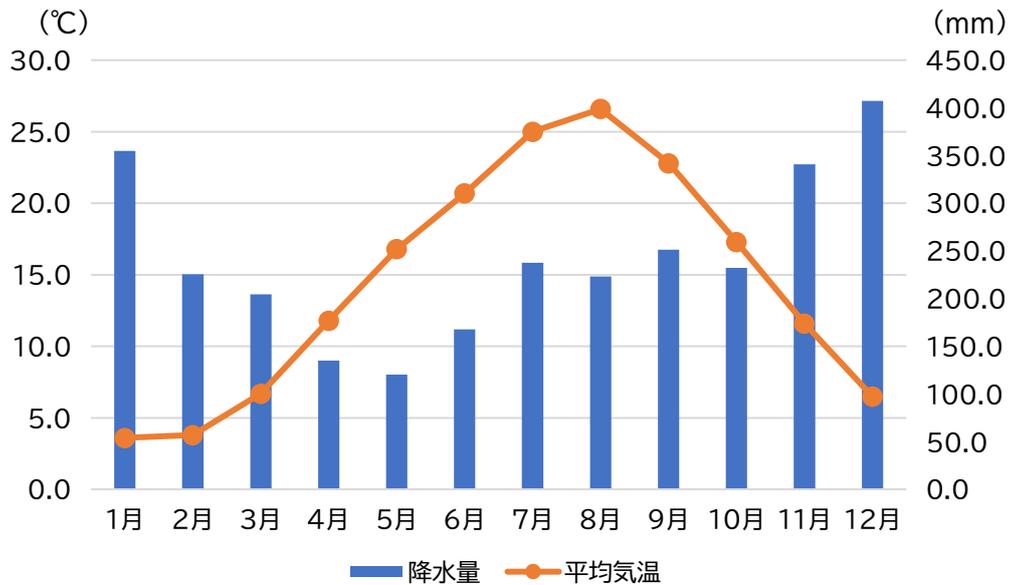


図7 糸魚川市の気温・降水量(出典 気象庁 1991～2020年の平年値)

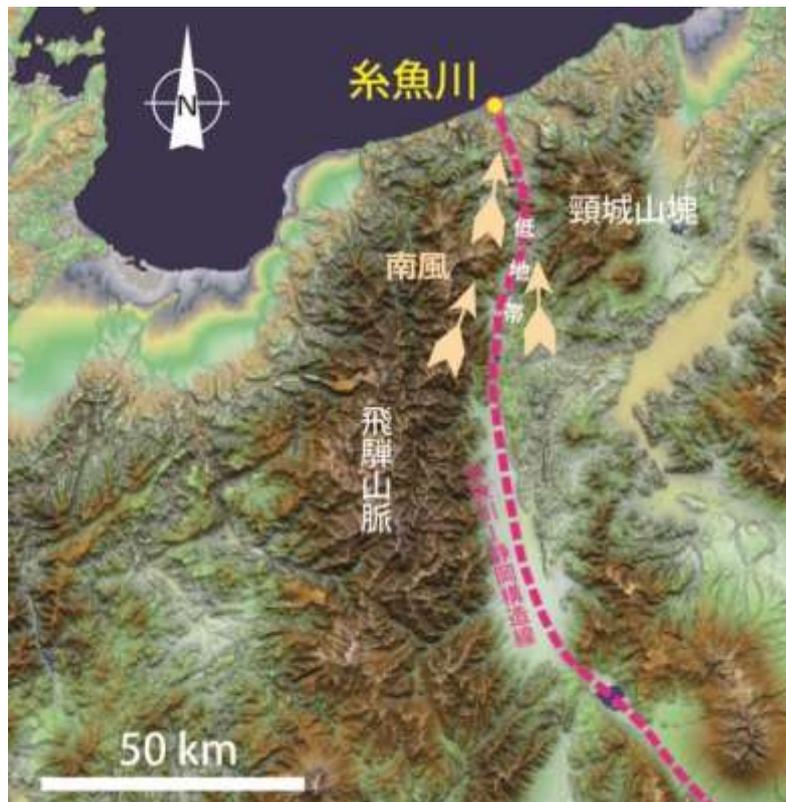


図8 姫川(糸魚川－静岡構造線)に沿って吹く強い南風

(4)生態系

本市では、起伏に富んだ地形や北陸地方特有の気候などにより、様々な動植物が生息・生育しています。

植生の特徴として、海浜植物から高山植物まで多様な植物が分布していることが挙げられます。

例えば、黒姫山周辺のカルスト地形に点在するドリーネの底部（標高約700m）では、本来は標高2,000m以上の亜高山帯又は高山帯に分布するキバナノコマノツメやミヤマアカバナ、オオバミゾホウズキが生育し、植生の逆転現象を見ることができます。また、昭和12（1937）年に国天然記念物に指定された「能生白山神社社叢」では、暖地性樹種のアカガシ、タブノキ、ヤブツバキ、寒地性樹種のアオキ、トキワイカリソウ、スミレサイシンなどが入り混じります。ブナ林の分布も特徴的で、通常ブナ林は標高500～1,500mに成立すると言われますが、本市では標高100mほどから見ることができます。



ブナ林

動物についても、豊かな自然環境の中で、様々な種類が生息しています。

陸では、国特別天然記念物のニホンカモシカやライチョウ、国天然記念物のヤマネのほか、レッドリストに掲載されているイヌワシ、ホンドオコジョ、ハクバサンショウウオ、ヒメギフチョウ、ムラヤママイマイなど、日本の固有種や絶滅のおそれがある動物が多く分布しています。

海は魚介類の宝庫となっており、その理由は大地の活動により形成された独特な海底地形にあります。沖合には富山トラフと呼ばれる深さ2,500～3,000mほどの海底の谷があり、ベニズワイガニやホッコクアカエビ、アンコウ類などの深海生物が生息しています。また、能生地域の海底は、海底火山の噴出物でできた岩石が漁礁となり、多種多様な魚介類が生息しています。水深が急に深くなる急峻な海底地形のため、沿岸付近でも、様々な水深に生息する魚介類が見られます。

このように、本市の自然環境が、独特で豊かな植物相・動物相を形成しています。



ニホンカモシカ



ベニズワイガニ

2 社会的状況

(1)市の沿革

現在の糸魚川市域は、明治 21 (1879) 年 6 月の内務大臣訓令により、それまで自然の集落を基礎としていた小規模な町村が集約され、明治 34 (1901) 年に 2 町 16 村となった区域が基本となっています。昭和 28 (1953) 年には町村合併促進法が施行され、以後、糸魚川市、能生町、青海町が誕生しました。

そして、平成 17 (2005) 年 3 月 19 日、糸魚川市、能生町、青海町が合併し、新「糸魚川市」が誕生しました。



図 9 平成合併前の市町

(2)人口

昭和 60 (1985) 年には約 6 万人、平成 17 (2005) 年の市町村合併時には約 5 万人でしたが、その後徐々に減少し、令和 5 (2023) 年 1 月 1 日では 39,767 人となっています。また、国立社会保障・人口問題研究所において公表された国勢調査に基づく人口推計によると、令和 22 (2040) 年には 27,202 人、令和 42 (2060) 年には 16,479 人まで減少すると予測されています。

表4 人口構造の状況(社人研推計準拠)



(3)土地利用

本市は、746.24 km²と広大な面積を有し、その多くは急峻な山林や原野などであり、総面積の94.6%を占めています。次いで農地の割合が高く、その大部分は田となっています。宅地の割合は1.44%で半分以上が住宅用地となっています。

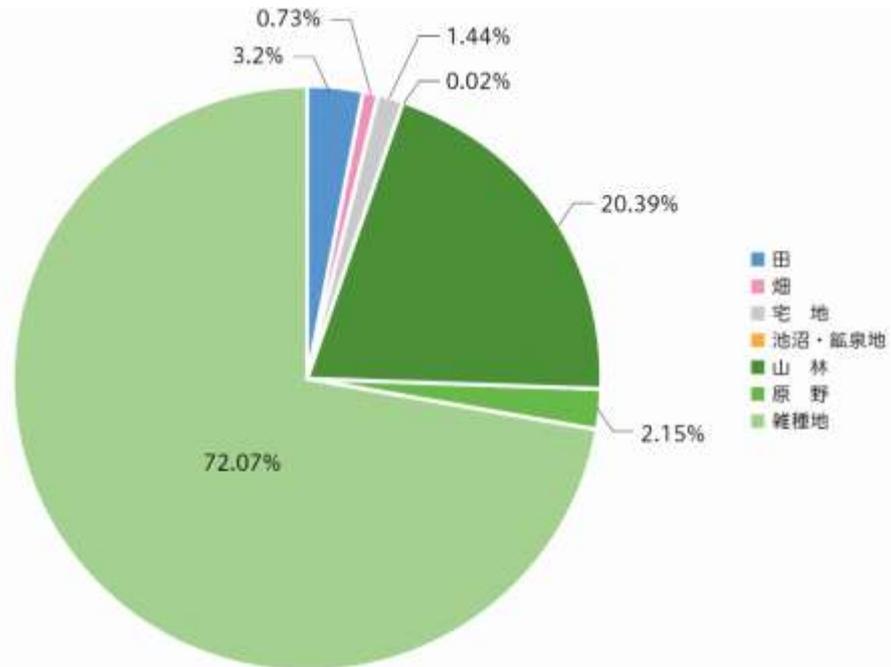
また、本市の面積の約12.8%にあたる95.29 km²が糸魚川市都市計画区域に指定され、そのうち10.49 km²の用途地域指定区域となっています。

◆土地利用別面積(R3.1.1現在)

(単位：km²・%)

区分	田	畑	宅地	池沼・ 鉱泉地	山林	原野	雑種地 その他	計
面積	23.86	5.48	10.71	0.14	152.15	16.07	537.83	746.24
割合	3.20	0.73	1.44	0.02	20.39	2.15	72.07	100.00

(資料：令和3年度固定資産税概要調書)



◆土地利用の指定状況(R3.4.1現在)

指定区分	面積	指定年月日	備考
糸魚川市都市計画区域	95.29 km ²	H19.10.30	内用途地域 10.49 km ²

(資料：糸魚川市資料)

図10 土地利用面積

(4)交通

交通網は、海岸線を走る一般国道 8 号と長野県へと抜ける一般国道 148 号が主要道路となっています。また、昭和 63 (1988) 年には北陸自動車道が開通し、海沿いの急崖地を走る一般国道 8 号通行止めの際の迂回路が確保されました。

鉄道は、大正 2 (1913) 年に北陸本線が、昭和 32 (1957) 年には大糸線が全線開通し、人の移動手段と物の流れの利便性が飛躍的に向上しました。平成 27 (2015) 年には北陸新幹線が開通し、首都圏への移動が乗換えなしで 2 時間台に大幅に短縮されました。なお、北陸本線は、北陸新幹線の開業に伴い J R から経営分離され、えちごトキめき鉄道株式会社が運行する日本海ひすいラインとなりました。

バスは、路線バスが 16 路線運行しているほか、コミュニティバス (定員 11 人以上) 及び乗合タクシー (定員 10 人以下) が 13 路線、鉄道や路線バスが行き届かない地域や中山間地域等を運行しています。



図 11 市内主要道路網

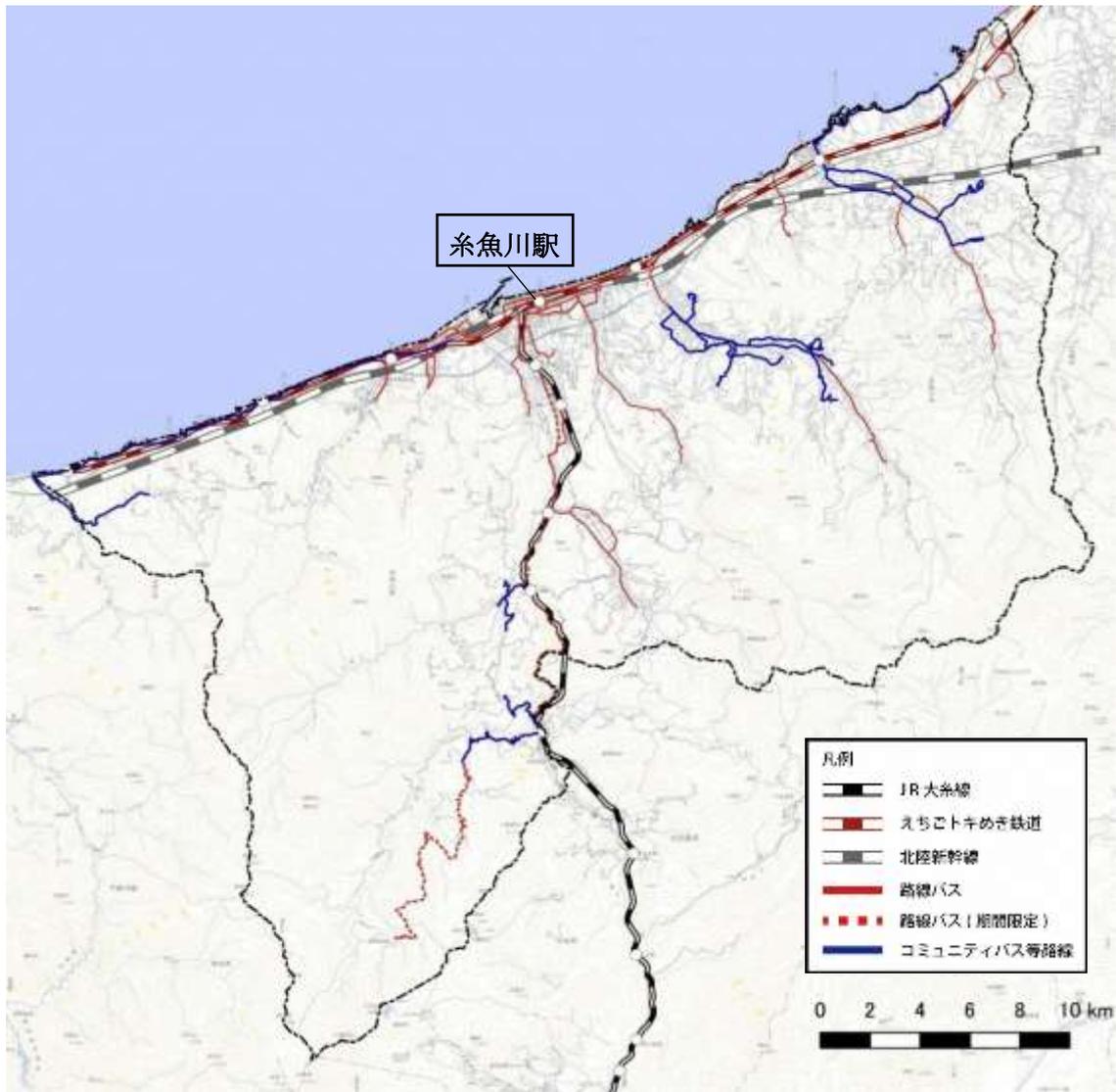


図 12 市内公共交通網

(5)産業

①農業

経営耕地面積は総面積の約 1.9% (143,531a) であり、そのうち水田が約 95%と稲作が主体となっています。そのほか、越後姫（イチゴ）、越の丸茄子、メロン、しいたけなどが特産品として生産されています。

②漁業

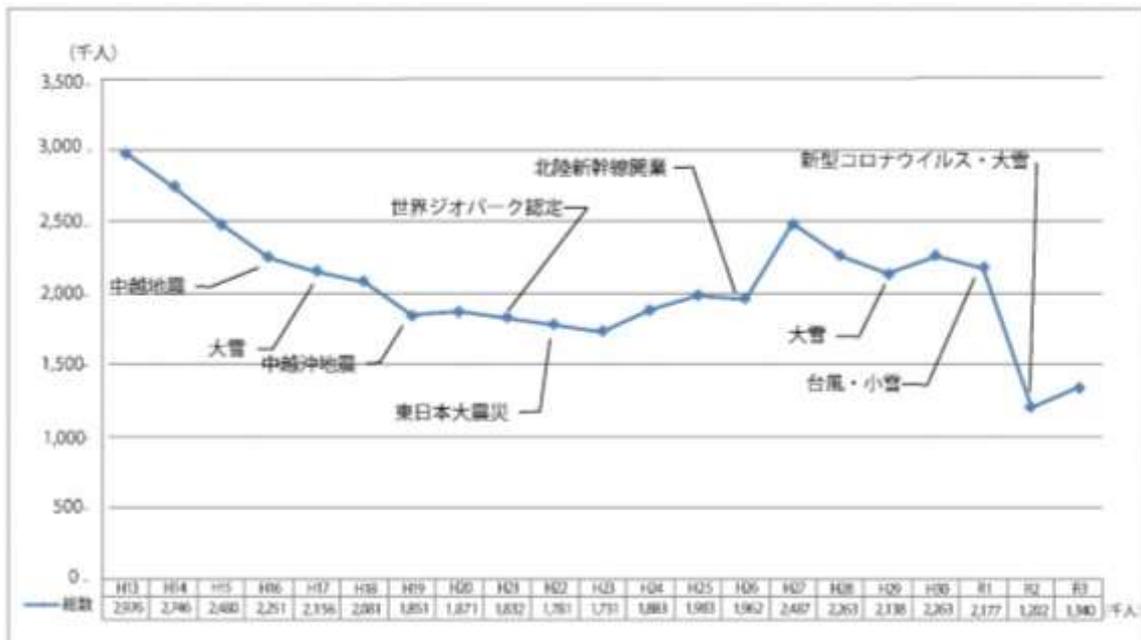
沖合は、四季を通して豊富な漁場として知られ、筒石、能生、浦本、糸魚川、親不知、市振といった漁港を中心として沿岸漁業が盛んです。なかでも、ベニズワイガニ、ホッコクアカエビ、アンコウ、タラ、ゲンギョなどは、本市の観光資源としても欠かせません。

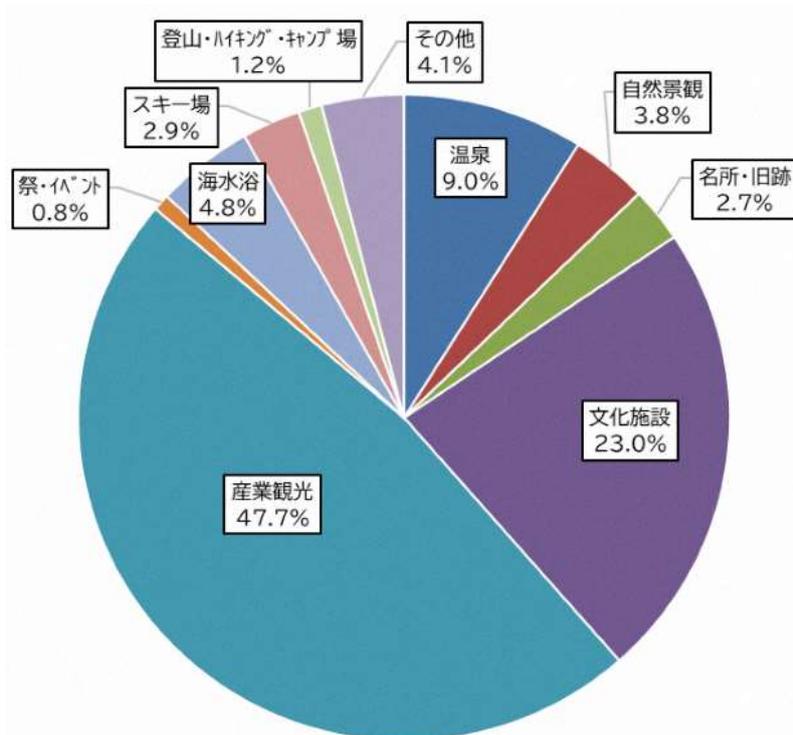
③観光

観光入込客数は、平成 13 年度の約 300 万人をピークとし、年々減少して約 170 万人まで落ち込みましたが、平成 27 (2015) 年の北陸新幹線開業に伴い約 250 万人にまで回復しました。しかし、新型コロナウイルスなどの影響により令和 2 年度は約 120 万人まで減少しました。

目的別観光入込客数は、道の駅などの産業観光が全体の 47.7%を占めており、次いで文化施設、温泉の順となっています。マリンドリーム能生（道の駅）などの入込客は多いものの、自然景観や名所・旧跡などの文化財が観光に活かされていないことがうかがえます。

表5 観光入込客数の推移





対 象	主な施設名称	対象地点数
温泉	柵口温泉、姫川温泉等	13
自然景観	高浪の池、小滝川ヒスイ峡等	9
名所・旧跡	翡翠園、相馬御風宅、親不知レンガトンネル等	7
文化施設	ジオパル、フォッサマグナミュージアム等	9
産業観光	マリンドリーム能生、ヒスイ王国館等	8
祭・イベント	おまんた祭り、奴奈川祭り等	42
海水浴	能生海水浴場、糸魚川海水浴場、親不知海水浴場等	6
スキー場	シーサイドバレースキー場、シャルマン火打スキー場	2
登山・ハイキング・キャンプ場	雨飾山登山、荒崎キャンプ場等	13
その他	糸魚川カントリークラブ、溪流釣り等	8
合 計		177

(令和3年度 糸魚川市観光統計)

図 13 目的別観光入込客数

(6) 博物館・資料館

文化施設のうち、糸魚川市内に所在する博物館・資料館は、以下の6館です。

① フォッサマグナミュージアム（公営）

日本列島の成り立ちや化石や鉱物など地質資料を収集・保管・展示しています。また、調査研究及びその成果の普及を通して、糸魚川ユネスコ世界ジオパーク活動の推進や市民の教育、学術及び文化の発展に寄与することを目的としています。



② 長者ヶ原考古館（公営）

国史跡長者ヶ原遺跡に隣接し、同遺跡の資料ほか、市内には279か所の遺跡が周知化されており、土木工事等に伴って発掘調査が行われた遺跡から出土した土器・石器などの遺物が展示されています。



③ 糸魚川歴史民俗資料館（公営）

「相馬御風記念館」とも言い、明治から昭和にかけて歌人、詩人、自然主義評論家、作詞家、翻訳家、随筆家、郷土研究者、さらに良寛研究の第一人者として活躍した相馬御風の関係資料を中心に、御風と親交のあった人々の作品や古書画などのコレクションを収蔵し、展示しています。



④ 能生歴史民俗資料館（公営）

能生谷の山間部から海岸部へ移築復元した「中門造り」の建物を使用し、能生地域の考古資料や生活用具を展示しています。



⑤ 塩の道資料館（民営）

古い民家を移築した建物で、屋根裏部屋まで見学でき、歩荷ほっかの装備（ショイコ、ワラミノなど）や生活資料など、約2,100点の資料が展示され、その一部は国指定重要有形民俗文化財に指定されています。



⑥ 木地屋民俗資料館（公営）

9戸の集落内に残されていた約1,400点におよぶ木地屋独特の道具類、古文書類は、国指定重要有形民俗文化財となっています。資料が展示されている木地屋民俗資料館は、集落内の民家を移築復元したもので、国登録有形文化財の建物です。木地作りの作業と密接に関連した独特の家屋構造を見ることができます。



(7)ユネスコ世界ジオパークへの認定経緯と取組

平成 16 (2004) 年に世界ジオパークネットワークが発足、同 19 (2007) 年に日本ジオパーク連絡協議会が発足し、本市も世界ジオパークを目指す意思表示がなされました。

平成 20 (2008) 年、糸魚川をはじめ、7 地域が日本ジオパークに認定され、同 21 (2009) 年、糸魚川、洞爺湖有珠山、島原半島の 3 地域が日本初の世界ジオパークに認定されました。その後、平成 27 (2015) 年、ジオパークがユネスコの正式プログラムに昇格し、同年糸魚川は再認定を受け、新たにユネスコ世界ジオパークとして活動を継続、発展させ、糸魚川と言えばジオパークのまちと認識されるほど定着しました。

ジオパークの認定に結びついたのは、以下のような先駆的な取り組みがあったからです。

- ・昭和62 (1987) 年 「フォッサマグナと地域開発構想⁴」の策定
- ・平成元 (1989) 年 糸魚川ー静岡構造線断層露頭の見学公園であるフォッサマグナパークの開園
- ・平成 2 (1990) 年 野外見学地を世界に先駆け「ジオパーク」と呼称
- ・平成 6 (1994) 年 フォッサマグナミュージアムの開館
長者ヶ原考古館の開館
- ・平成13 (2001) 年 長者ヶ原遺跡公園の開園

このように、本市の代表的な見学地が整備され、また博物館活動によって新たな資源が掘り起こされ、市民にそれらを知る機会が提供されてきました。これらの活動がジオパーク認定の基礎になりました。

糸魚川ー静岡構造線やフォッサマグナ、ヒスイ、ヒスイ文化などは、市民が糸魚川を誇りに思う拠り所でした。ジオパークの認定により、市民が普段目にしていない景観や地層、神社仏閣、祭り、舞楽なども、ジオパークの貴重な構成資源であることがわかり、今まで以上に糸魚川に対する誇りをもつことができるようになりました。市民やさまざまな団体との協働によって、これらの資源を守り、持続可能な地域社会をつくっていかうとする取り組みは、今後ますます進展していくことが期待されます。

先述したように、ジオパークの基本的な使命は、地形・地質や動植物・生態系、歴史・文化の分野にまたがる資源の保護・保全にあり、それをジオツーリズムという手段によって、持続可能な地域の経済発展を実現していくことにあります。ジオパーク活動は、文化財保存活用地域計画の推進を強く後押しするものです。

糸魚川ジオパークは、24 の代表的なエリアから構成されています。

⁴ ヒスイやフォッサマグナなど、糸魚川市の特徴的な地質資源を地域振興に活用する構想

表6 糸魚川ジオパークの各エリアの概要

エリア名	概要・特徴
1 市振	ヒスイと化石と芭蕉の宿場町
2 親不知	断崖と街道と東西文化
3 青海海岸	縄文人のヒスイ海岸
4 青海川ヒスイ峡	地下探部の地質現象
5 今井	フォッサマグナができたころの地質と岩石
6 糸静線と塩の道（北部）	巨大断層に沿う塩の道
7 マイコミ平	ドリーネ群と高山植物
8 橋立金山	糸魚川最大の金鉱山跡
9 小滝川ヒスイ峡	ヒスイのふるさとと明星山の大岩壁
10 樽海新道	日本海と北アルプスを繋ぐ登山道
11 姫川渓谷（大系線）	ジオパーク鉄道の旅
12 糸静線と塩の道（南部）	巨大断層に沿う塩の道
13 姫川渓谷	大隆起山地の浸食・剥離
14 蓮華	噴気帯と氷河がつくった湿原
15 糸魚川海岸	糸魚川文化の玉手箱
16 美山公園・博物館	ジオパークの情報センター
17 月不見の池	地すべり・棚田・石仏巡り
18 海谷渓谷	海底火山の大断面
19 雨飾山	日本の百名山・久恋の山
20 焼山	活火山における温泉と砂防
21 弁天岩	海底火山がもたらした海洋文化
22 神道山	海底火山の山体と里山景観
23 権現岳	山間部の小さな不思議な変動帯
24 筒石・浜徳合	砂岩泥岩互層と漁村



図14 糸魚川ジオパークのエリア図

(8)東西文化

本市は、新潟県の最西端に位置し、西に隣接する富山県との県境には急峻な北アルプスが南北に延び、それは親不知の断崖絶壁となり日本海に落ち込みます。古くから東西交通の難所であったことが、東西文化を区切る大きな要因になっていました。このような自然的・地理的な要因によって、下表に示すような西と東の文化の混在が、人々の暮らしの中にも現れています。地質的にも糸魚川－静岡構造線を境に東西の分岐となり、例えば、電気の周波数（50Hz・60Hz）の境は本市に当たります。

西	項目	東
 <p>丸型</p>	正月の雑煮餅	 <p>角型</p>
 <p>ブリ</p>	年取り魚	 <p>サケ</p>
 <p>昆布</p>	出汁の素材	 <p>鰹節</p>
 <p>牛肉</p>	肉じゃがに使われる肉の種類	 <p>豚肉</p>
 <p>青色</p>	灯油ポリタンクの色	 <p>赤色</p>

図 15 東西文化の違い

3 歴史的環境

(1)旧石器時代・縄文時代

本市は、日本随一のヒスイ産出地であり、世界最古級のヒスイ文化発祥の地ともいわれるほどヒスイとの関わりの大変深い地と言えます。ヒスイの利用を知ることができる最も古い例は、大角地遺跡で発見されたヒスイ製のたたきいし敲石で約 6,500 年前の縄文時代前期に遡ります。約 5,000 年前の縄文時代中期には、本市でのヒスイの加工が盛んとなり、たいしゆ大珠などのヒスイの玉類は国史跡ちようじかがはら長者ヶ原遺跡や国史跡てらじ寺地遺跡をはじめとした本市のヒスイ加工遺跡から列島各地に供給されました。



大角地遺跡 ヒスイ製敲石

(2)弥生時代・古墳時代

ヒスイの加工は、5世紀頃の古墳時代中期まで下表の製作遺跡で継続され、勾玉などの玉類の製作が知られています。

表7 弥生～古墳時代の主なヒスイ製作遺跡

遺跡名	時代
<small>おおつが</small> 大塚遺跡	弥生時代前期
<small>いちのみや</small> 一の宮遺跡	弥生時代中期
<small>ごしようやま</small> 後生山遺跡	弥生時代後期
<small>ふえふきだ</small> 笛吹田遺跡	古墳時代前～中期
<small>みなみおしあげ</small> 南押上遺跡	古墳時代前期
大角地遺跡	古墳時代中期
<small>たぶせ</small> 田伏遺跡	古墳時代中期



笛吹田遺跡 ヒスイ製玉類工程品

こうしたヒスイ加工の背景には、縄文時代からのけつかざり玦飾（けつじょうみみかざり玦状耳飾）や磨製石斧の製作技術があり、かつせき滑石やじやもんがん蛇紋岩などといった石材の加工（せんこう整形・穿孔）技術の発達がかがえまします。

本市に伝わる「ぬ なかわひめ奴奈川姫」伝説とヒスイを主体とした玉作りに、糸魚川市の文人相馬御風も興味を持ち、奴奈川姫を祭神とする奴奈川神社の起源などにも言及しています。本市で開催された翡翠シンポジウムやヒスイ文化フォーラムでは、弥生時代・古墳時代におけるヒスイを用いた玉作り集団の象徴としての「奴奈川姫」に注目が寄せられ、『古事記』の八千矛命（大国主命）と奴奈川姫との求婚神話については、めのう瑪瑙・へきぎよく碧玉・水晶の玉作り集団である出雲とヒスイの玉作り集団である越（北陸）の奴奈川との政治的関係を物語っていると解されました。

このように、本市の原始はヒスイ加工の変遷を基本として語られ、その開始と終焉の時期やその背景などの解明が大きな歴史的課題となっています。

(3)奈良時代・平安時代（古代）

5世紀後半以降になると遺跡数は激減し、6世紀から8世紀中頃までは見つかったり遺跡も少なく、当時の人々の生活が分かっていない時代です。この間は、近畿地方に中央集権的な律令国家が誕生した時代に相当し、『続日本紀』には大宝2（702）年3月に越中国の4郡「頸城」「魚沼」「三島」「蒲原」が越後国に編入されるとあり、『延喜式』には「奴奈川神社」「大神社」などの神社、「滄海（青海）」や「羈石」といった駅が記載されていることから、本市は「越後国 頸城郡 奴奈川郷」に該当します。

8世紀後半から10世紀になると沖積地の微高地や河岸段丘に集落が営まれるようになり、姫川下流左岸の須沢角地A遺跡では堅穴建物跡を主体とした7世紀末から10世紀末まで、海川下流右岸の山崎A遺跡では掘立柱建物と小規模な堅穴建物が混在した8世紀後半から11世紀までの集落変遷を確認できます。また、9・10世紀は姫川



山崎A遺跡 土師器碗・土師皿

下流右岸の高位段丘に原山遺跡や新割遺跡といった小規模な堅穴建物から成る小集落が点在します。山崎A遺跡では150㎡を超える床面積の掘立柱建物跡に大量に投棄された土師器碗・皿が伴うなど遺構や遺物が見つっています。これらの遺跡や遺物は、都をつなぐ北陸道の越後国府や佐渡国の玄関口としての役割が、「奴奈川郷」にあったことを示します。

(4)鎌倉時代・室町時代（中世）

中世において、本市は越後国頸城郡にあり「沼川保」あるいは「沼河保」などと表記されていたことは15世紀代の諸資料から確認でき、中世末期になると現在の大字単位に集落が成立していたようです。北陸新幹線建設に伴って発掘された山岸遺跡では、土石流堆積物の下層から多くの大規模な掘立柱建物跡や湧水を引こんだ池、白磁・青磁などの舶来磁器が検出され、小型の金属片に刻まれた傘の文様から北条



根知城跡

一門の名越氏と関係のある館跡ではないかと推定されています。このほか、13・14世紀の複数の掘立柱建物跡から成る区画で構成される山崎A遺跡、15・16世紀の館跡と寺跡から成る岩野B遺跡など興味深い発掘調査の成果も少なくありません。

また、越後の最西端にあり、姫川谷では信濃とも接することから、戦国時代においては越後勢の最前線として堅固な山城も各地に築られました。なかでも、信越国境を遠望できる姫川流域の根知城と、上杉氏の親類に当たる三本寺氏の居城として早川流域を眼下に納める不動山城は、規模も大きく遺構の残存も良好です。その他、親不知海岸の東端に位置する勝山城は、陸路だけでなく、沖を通る船の見張りにも絶好な要所と言えます。戦国乱世から天下統一への政治の流れを、これら国境の城砦群から読み取ることができます。

このほか、今日まで継承されている舞楽などにおいても西からの文化的影響を受けていることから、人と物資が行き交う交通の要衝として古くから発展をとげてきたと言えます。

(5)江戸時代（近世）

近世になると地理的環境や盛んな廻船などにより、本市は更なる発展を遂げ、東西を結ぶ陸路・加賀街道は海岸に沿って整備されました。西端の市振には関所が設けられ、沿道の青海、糸魚川、梶屋敷、能生は宿場として栄え、散見できる町家造りの民家は往時をしのばせます。

慶長5（1600）年に上杉景勝の後に封じられた堀秀治の一門・堀清重によって清崎城が築かれました。高田藩家老が代々、城代を務めました。高田藩のお家相続、いわゆる越後騒動に巻き込まれて延宝9（1681）年に廃城となります。その後を治めた松平氏は加賀街道沿いの横町に陣屋を構え、繁栄の中心は城から陣屋・宿場へ移りました。また、糸魚川を起点とする松本街道は姫川流域の山間を縫うように整備され、運送を生業とする歩荷^{ほっか}や牛方^{うしかた}は廻船によって運ばれてきた塩や海産物を松本方面へ運び、煙草、大豆などを糸魚川へ運んできました。根知谷・山口の関所跡をはじめ沿道の歩荷宿跡、茶屋跡、石仏群は往時をしのばせています。

古代の北陸道、近世の加賀街道と日本の東西を繋ぐ交通の要衝である歴史は、明治以降の鉄道敷設や現代の高速道路・新幹線ルートとなることにもつながってきます。



雪の中を歩く歩荷



清崎城絵図

(6)明治・大正・昭和（近代・現代）

明治時代になると、それまで通行の制限があった加賀街道や松本街道は、明治2（1869）年に関所・番所が廃止されたことにより、人や物の行き来がさらに活発となります。

明治11（1878）年の明治天皇御巡幸を契機に新道開削の運動が起きた親不知では、明治16（1883）年に新道が整備されました。その後、昭和41（1966）年には現在の一般国道8号、昭和63（1988）年には北陸自動車道が開通しています。波打ち際の渚道を一世代とし、北陸自動車道までの四世代の道路を見ることができます。

江戸時代の参勤交代でにぎわった加賀街道は、明治初期には第一等道路線（幹線）となり、北陸道線市振往来（新潟一市振）と呼ばれました。

また、越後と信州の物流を担った松本街道は明治時代に荷車・馬車が通れる平坦な道路建設を目指し、運動が展開されました。明治25（1892）年には平坦な松本線が完成し、荷車・馬車が通れるようになりました。

いずれも、昭和27（1952）制定の新道路法により一級国道八号・二級国道一四八号となり、昭和39（1964）年には一級・二級の区分が廃止され、現在の一般国道8号線・一般国道148号となりました。

複雑な地質を持つ本市では、糸魚川－静岡構造線の西側で、金属鉱物資源（金・銀・銅・鉛）や工業原料鉱物資源（石灰石・白土・蛇紋岩・白矽石・石綿・絹雲母）、そして化石燃料資源（石炭）などが産出します。それらの地下資源を利用することで本市の工業が大きく発展しました。

現在でも本市の一大産業となっている石灰石産業は、大正10（1921）年に糸魚川西頸域最大の工場である電気化学工業株式会社（現 デンカ株式会社）青海工場が建設され、石灰窒素とカーバイドの製造を開始しました。

石炭は、小滝地区の赤禿山南・北斜面で採掘されました。北斜面では明治20年代から富山鉱業越後炭鉱会社により採掘されました。鉱区面積は約2キロ平方メートル、約180人の作業員によって採掘されており、現場から索道（架線）と軌道を用いて糸魚川停車場（駅）まで運搬されていました。しかし、大正9年頃には採掘は行われなくなり、昭和初期から終戦までは小規模な採掘、あるいは試掘が行われるのみでした。



大正時代末期の本町通り(加賀街道)

(7)災害史

自然が豊かである反面、急峻な地形や急流河川ゆえに地すべりや洪水が幾度も発生しています。また、大雪被害、雪崩災害の発生も多く、特別豪雪地域に指定されています。さらに、波浪や高潮被害、また、活火山焼山による火山災害の危険性もぬぐえないなど、自然災害が多岐にわたる地域であることが、市民生活や経済活動の足かせとなっています。

表8 自然災害の概要

発生年	災害名	備考
延享4(1747)年	卯年の満水	虫川番所が流失
寛延4(1751)年	宝暦地震	名立崩れ
安永6(1777)年	糸魚川大火	被害建物525戸
寛政3(1789)年	朝霧沢雪崩	死者5名
文政7(1824)年	戸倉山大雪崩	死者21名
大正11(1922)年	勝山大雪崩災害	死者92名
昭和22(1947)年	柵口地すべり	倒壊住家53戸
昭和44(1969)年	外波水害	死者2名
昭和49(1974)年	焼山水蒸気爆発	死者3名
昭和60(1985)年	玉ノ木地すべり	死者10名
昭和61(1986)年	柵口雪崩災害	死者13名
平成7(1995)年	姫川7.11水害	国道148号不通
平成8(1996)年	蒲原沢土石流災害	死者14名
平成28(2016)年	糸魚川市駅北大火	147棟焼損、焼失面積4万㎡
令和2(2020)年	来海沢地すべり	建物全壊5棟、半壊1棟
令和4(2022)年	島道雪崩災害	死者1名



柵口なだれ災害受難者慰霊碑
(昭和61年柵口雪崩災害)



玉ノ木地すべり被害